

『史記』項羽本紀中の数の表現

加藤 敏

はじめに

『史記』項羽本紀、またこれと対照的に書かれている高祖本紀には、多くの数詞が用いられている。それらの用例を検討してみると、両本紀には、

- ・願爲諸君快戦、必三勝之。(項羽本紀)

(願はくは諸君の爲に快戦し、必ず三たび之に勝たん。)

- ・高祖爲人、隆準而龍顔、美須髯、左股有七十二黒子。(高祖本紀)

(高祖は人と爲り、隆準にして龍顔、美しき須髯あり、左股に七十二黒子有り。)

といったように、数詞が象徴的な意味合いを持って用いられている例や、

- ・連百萬之軍、戦必勝、攻必取、吾不如韓信。(高祖本紀)

(百萬の軍を連ね、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るは、吾韓信にしかず。)

のように単に数の多さを誇張したと思われる例が見られる。また、一方では、

- ・於是項王上馬騎、麾下壯士騎從者八百餘人。

(是において項王馬に上りて騎し、麾下の壯士騎して從ふ者八百餘人なり。)

- ・項王渡淮、騎能屬者百餘人。

(項王淮を渡るに、騎の能く屬する者百餘人のみ。)

- ・項王乃復引兵東、至東城。乃有二十八騎。

(項王乃ち復た兵を引きて東し、東城に至る。乃ち二十八騎有り。)

などのように、項羽が垓下から逃走して最期に至るまでの、その軍騎の減少の過程を詳細に述べた用例も見られる。本稿ではそれらのうち、「楚

軍夜撃阬秦卒二十餘萬人新安城南」の「二十餘萬人」という表現、及び「火三月不滅」の「三」という数字の持つ意味について考えてみたい。

一、「楚軍夜撃阬秦卒二十餘萬人新安城南」の「二十餘萬人」について

「楚軍夜撃阬秦卒二十餘萬人新安城南」（項羽本紀）とは、項羽が降伏した秦の將軍章邯の軍勢を新安で阬にした記述である。この「二十餘萬人」という表現はどのようなものとして理解できるのであろうか。これが単なる誇張であるとしたら、なぜ「二十餘萬」という数を用いたのであろうか。或いは、「二十餘萬」という数にはなんらかの根拠があるのであろうか。

項羽が行なったとされるこの大量の殺戮は、『史記』の他の部分にも、

・詐阬秦子弟新安二十萬、王其將、罪六。

（詐りて秦の子弟を新安に阬にすること二十萬、其の將を王とするは、罪の六なり。）
（高祖本紀）

・羽詐阬殺秦降卒二十萬人於新安。

（羽詐りて秦の降卒二十萬人を新安に阬殺す。）
（秦楚之際月表）

・至新安、項王詐阬秦降卒二十餘萬人。

（新安に至り、項王詐りて秦の降卒二十餘萬人を阬にす。）

（淮陰侯列伝）

・項籍之引兵西至新安、又使布等夜撃阬章邯秦卒二十餘萬人。

（項籍の兵を引きて西し新安に至るや、又布等をして夜撃ちて章邯の卒二十餘萬人を阬にす。）
（黥布列伝）

のように言及されているが、その人数は「二十萬」あるいは「二十餘萬」と、ほぼ統一された記述がなされている。

また『漢書』の項籍伝、高帝紀においても、

・於是夜撃阬秦軍二十餘萬人。

（項籍伝）

（是において夜撃ちて秦軍二十餘萬人を阬にす。）

（項籍伝）

- ・詐阬秦子弟新安二十萬、王其將、罪六也。

(詐りて秦の子弟を新安に阬にすること二十萬、其の將を王とするは、罪の六なり。)

(高帝紀)

などとなっており、『史記』の記載と同様である。さらに『資治通鑑』も、

- ・於是楚軍夜擊阬秦卒二十餘萬人新安城南。

(是において楚軍夜撃ちて秦卒二十餘萬人を新安城南に阬にす。)

(漢紀一 高帝元年)

と、『史記』項羽本紀の表現をそのまま記している。この約二十万人の「阬」という行為は、項羽の行為として、その人数とともに『史記』以後もそのまま継承されているのである。

「二十萬人」あるいは「二十餘萬人」という人数について検討する前に、先ず『史記』のなかで「阬」ということがどのように記されているかについて見てみたい。『史記』において「阬」を行った者は、秦の將軍の白起、始皇帝そして項羽の三人である。

始皇帝が行った「阬」は、以下の二回である。

- ①秦王之邯鄲、諸嘗與王生趙時母家有仇怨、皆阬之。 (秦始皇本紀)

(秦王邯鄲に之き、諸の嘗て王趙に生まれし時母の家と仇怨有るものは、皆之を阬にす。)

(秦始皇本紀)

- ②犯禁者四百六十餘人、皆阬之咸陽、使天下知之、以懲後。

(秦始皇本紀)

(禁を犯す者四百六十餘人、皆之を咸陽に阬にし、天下をして之を知らしめ、以て後を懲す。)

(秦始皇本紀)

①は、秦が趙を滅ぼし、秦王自ら邯鄲に赴き、かつて自分が趙で生まれた時、母の家と仇怨の関係にあった者たちを阬にしたものである。その人数が記されていないが、おそらく数万人というような多人数ではなかったであろう。また、②は所謂坑儒の記述である。これも人数は「四百六十餘

人」にとどまる。

一方、白起は、長平の戦（前二六〇）の際、投降した趙の士卒四十万人を「阬」にしている。白起列伝ではその時の様子を、

括軍敗、卒四十萬人降武安君。武安君計曰、前秦已拔上黨、上黨民不樂爲秦而歸趙。趙卒反覆、非盡殺之、恐爲亂。乃挾詐而盡阬殺之、遺其小者二百四十人歸趙。 (白起列傳)

(括の軍敗れ、卒四十萬人武安君に降る。武安君計りて曰く、前に秦已に上黨を抜くに、上黨の民秦と爲るを樂しまずして趙に歸す。趙の卒反覆すれば、盡く之を殺すに非ずんば、恐らくは亂を爲さん、と。乃ち挾詐して盡く之を阬殺し、其の小なる者二百四十人を遺して趙に歸さしむ。)

のように記している。白起は後に死を賜わるのであるが、その時、彼は次のように述懐し、自刎している。

秦王乃使使者賜之劍、自裁。武安君引劍將自刎、曰、我何罪于天而至此哉。良久曰、我固當死。長平之戰、趙卒降者數十萬人、我詐而盡阬之。是足以死。遂自殺。 (白起列傳)

(秦王乃ち使者をして之に劍を賜ひ、自ら裁かしむ。武安君劍を引き將に自刎せんとして曰く、我何ぞ天に罪ありて此に至らんや、と。良久しくして曰く、我固より當に死すべし。長平の戦、趙卒の降る者數十萬人あり、我詐りて盡く之を阬にす。是れ以て死するに足れり、と。遂に自殺す。)

また、項羽が行った「阬」は、次の三回である。

③項梁前使項羽別攻襄城、襄城堅守不下。已拔、皆阬之、還報項梁。

(項羽本紀)

(項梁前に項羽をして別に襄城を攻めしむるも、襄城堅く守りて下らず。已に抜き、皆之を阬にし、還りて項梁に報ず。)

- ④漢之二年冬、項羽遂北至城陽、田榮亦將兵會戰。田榮不勝、走至平原、平原民殺之。遂北燒夷齊城郭室屋、皆阬田榮降卒、係虜其老弱婦女。

(項羽本紀)

(漢の二年冬、項羽遂に北して城陽に至り、田榮も亦た兵を將ひて會戦す。田榮勝たず、走りて平原に至るに、平原の民之を殺す。遂に北のかた燒きて齊の城郭室屋を夷げ、皆田榮の降卒を阬にし、其の老弱婦女を係虜す。)

- ⑤楚軍夜擊阬秦卒二十餘萬人新安城南。 (項羽本紀)

(楚軍夜撃ちて秦の卒二十餘萬人を新安城の南に阬にす。)

③は前二〇八年、襄城の降卒を阬にした記述である。この時、項羽は項梁の命によって襄城を攻撃したが、襄城の守りは固く、やっとのことで下し、その後城兵もすべて阬にしたのである。阬の人数及び阬という手段を採るについての判断は記されていない。④は、前二〇六年十二月、叛旗をひるがえした田榮を討った時、その降卒を阬にした記述である。項羽は斉・趙が反旗を翻したと聞いて大いに怒り、田榮を討ったのである。斉の城郭を焼き、降卒を阬にし、老若婦女を虜にしたという描写は項羽の怒りの凄じさをよく物語っている。そして、⑤は問題の記述である。やはり、前二〇六年十一月のことであった。この「二十餘萬人」の阬は、『史記』においては白起の四十万人に次ぐ大量の殺戮である。この時項羽は、

項羽乃召黥布・蒲將軍計曰、秦吏卒尚衆、其心不服。至關中不聽、事必危。不如擊殺之、而獨與章邯・長史欣・都尉翳入秦。 (項羽本紀)

(項羽乃ち黥布・蒲將軍を召し計りて曰く、秦の吏卒尚ほ衆くして、其の心服せず。關中に至りて聽かずんば、事必ず危からん。撃ちて之を殺して、獨り章邯・長史欣・都尉翳と秦に入るにしかず、と。)

と、降卒が背くことを懸念して阬という手段を採るに至っている。これは怒りによる行為ではなく、武將としての冷静な判断によるものである。

ところでこの判断は、先の白起が趙の降卒にした判断とよく似通っている。白起は、趙の降卒を生かしておくことが後の憂いとなることを案じたのであった。項羽もまた関中に入った時、秦の降卒が危険な存在になることを案じたのである。項羽はこの殺戮を黥布等に命じて行わせている。黥布伝の論贊では、

太史公曰、英布者、其先豈春秋所見楚滅英・六、臯陶之後哉。身被刑法、何其拔興之暴也。項氏之所阬殺人以千萬數、而布常爲首虐。功冠諸侯、用此得王、亦不免於身爲世大僂。
(黥布列傳)

(太史公曰く、英布は、其の先豈に春秋に見ゆる所の楚英・六を滅ぼすの臯陶の後なるか。身刑法を被り、何ぞ其の拔興することの暴かなるや。項氏の阬殺する所の人は千萬を以て數ふ、而して布常に首と爲りて虐す。功は諸侯に冠たり、此を用て王たるを得るも、亦た身は世の大僂を爲すを免れず。)

のように、黥布がその行為故に世の正当な殺戮を免れることはできなかったと言及されている。この言及はまた白起の述懐と軌を一にしている。

これは、已に指摘されているように『史記』に見られる因果応報の思想の表れと考えることができるであろうが、『史記』においては、この項羽の行為は、白起の行為に対比されるように描かれていると思われる。おそらく、この項羽の秦軍に対する行為は、まさしく秦の諸侯に対する行為と対比されているのであろう。

次に二十余万という数について考えてみたい。この時、章邯はどの程度の軍勢を率いていたのであろうか。項羽本紀には次のような記述がある。この記述は、項羽との戦いに敗れた章邯に対して、陳余が項羽への降伏を勧めた時のものである。これによれば、

今將軍爲秦將三歲矣、所亡失以十萬數、而諸侯並起滋益多。

(項羽本紀)

(今將軍秦の將爲ること三歳なり、亡失する所は十萬を以て數ふ、而して諸侯並びに起ること滋くして益ます多し。)

とあるように、章邯はこの時すでに十万の軍勢を失っている。降伏後、項羽に阮にされた「二十餘萬人」を加えると、彼の軍勢は約三十万人であったことになる。当時の軍勢の数については、食料の生産、軍糧の維持・輸送ということから考えて、数十万の軍勢は実際には十分の一程度の数であったという指摘もあるが、通常、秦の將軍がどの程度の軍勢を率いていたかということについては、以下の記述がある。

⑥秦已并天下、乃使蒙恬將三十萬衆北逐戎狄、收河南。(蒙恬列伝)

(秦已に天下を并せ、乃ち蒙恬をして三十萬の衆を將ゐて北のかた戎狄を逐ひ、河南を収めしむ。)

⑦於是始皇問李信、我欲攻取荆。於將軍度用幾何人而足。李信曰、不過用二十萬人。始皇問王翦。王翦曰、非六十萬人不可。始皇曰、王將軍老矣。何怯也。李將軍果勢壯勇、其言是也。遂使李信及蒙恬將二十萬南拔荆。……秦軍走。……於是王翦將兵六十萬人、始皇自送至灞上。

(王翦列伝)

(是において始皇李信に問ふ、我攻めて荆を取らんと欲す。將軍において度るに幾何の人を用てして足るか、と。李信曰く、二十萬人を用ゐるに過ぎず、と。始皇王翦に問ふ。王翦曰く、六十萬人に非ざらんば不可なり、と。始皇曰く、王將軍老いたり。何ぞ怯せるや。李將軍は果勢壯勇なり、其言は是なり、と。遂に李信及び蒙恬をして二十萬を將ゐて南のかた荆を抜かしむ。……秦軍走ぐ。……是において王翦兵六十萬人を將ゐ、始皇自ら送りて灞上に至る。)

⑥は、蒙恬が三十萬人の兵を率いて戎狄を駆逐した記述である。この時の軍勢は『淮南子』人間訓では、「因發卒五十萬、……」に作っているが、『史記』ではこのように記されている。⑦は、秦が楚を攻撃する時、李信

は二十万人の軍勢で可能であると答え、王翦は六十万人でなければだめであると答えた。秦王は李信の言を用いたが、彼は果たして敗れてしまい、結局王翦が六十万人の軍勢を擁して楚を討った、という記述である。

これらの記述からすると、この時章邯が率いていた三十万という軍勢は、秦の主力としては十分に想定できるものである。

『史記』において、項羽の坑という行為とその人数は白起の諸侯に対する行為と対比されて描かれ、「二十餘萬」という数は、単なる誇張ではなく、少なくとも『史記』の記述においては矛盾のないものとなっていると言えるであろう。

二、「火三月不滅」の「三」について

居數日、項羽引兵西屠咸陽、殺秦降王子嬰、燒秦宮室。火三月不滅。

(項羽本紀)

(居ること數日、項羽兵を引き西に咸陽を屠り、秦の降王子嬰を殺し、秦の宮室を焼く。火三月滅せず。)

これは、咸陽に入った項羽が咸陽の宮城に火を放った時の記述である。「三月不滅」が、誇張表現であることは確かであろうが、単に「三カ月」という意味でのみ用いられているのかどうかについて考えてみたい。

項羽本紀には「三」の用例が十八例ある。これらのうち、

⑧范増數目項王、舉所佩玉玦、以示之者三。

(范増數しば項王に目し、佩ぶる所の玉玦を舉げて、以て之に示すと三たびす。)

⑨楚騎追漢王。漢王急、推墮孝惠・魯元車下。滕公常下收載之。如是者三。

(楚騎漢王を追ふ。漢王急して、推して孝惠・魯元を車下に墮す。滕

公常に下りて収めて之を載す。是くのごとくすること三たびす。

⑩漢有善騎射者樓煩、楚挑戰三合、樓煩輒射殺之。

(漢に騎射を善くする者樓煩有り、楚挑戰すること三合、樓煩は輒ち之を射殺す。)

⑪今日固決死。願爲諸君快戰、必三勝之。

(今日固より死を決す。願はくは諸君の為に快戦し、必ず三たび之に勝たん。)

などは三回という行為の回数を表している。また、

⑫楚雖三戸、亡秦必楚也。

(楚は三戸と雖も、秦を亡ぼすは必ず楚なり。)

⑬持三日糧、以示士卒必死、無一還心。

(三日の糧を持ちて、以て士卒に必死にして、一も還る心無きを示す。)

⑭至咸陽、留司馬門三日、趙高不見、有不信之心。

(咸陽に至り、司馬門に留まること三日、趙高見ず、不信の心有り。)

⑮燒秦宮室、火三月不滅。

⑯今將軍爲秦將三歲矣。

(今將軍秦の將爲ること三歳なり。)

⑰令四面騎馳下、期山東爲三處。

(四面の騎をして馳せ下らしめ、山東に三處と爲らんことを期す。)

などの「三」は、個体や時間・場所などを表している。

このうち、三回という行為の回数を表す「三」の意味については、外山滋比古氏の指摘が参考になるであろう。氏は童話の構造を分析し、三回の繰り返しが童話によく見られる構造形式であり、二度の繰り返しとは異なり、意識的であることが関手にもわかり、現実の世界では同じことが相次いで三度繰り返し起こるといふことは希有のことであるから、三回の繰り返しは超現実感を与える、と述べている。

つまり、三回の繰り返しという行為について言えば、その行為が意識的

なものであり、一つの完結したものであることを示し、その行為者の意図なり在り方なりが明確に示唆されるということになるのであろう。例えば⑧では、范増の玉玦を挙げるという行為が意図的であり、完結した感じをあたえ、かつ范増の意図が明確化されるのである。また、⑩の例では、圧倒的に不利な状況下で三度勝つということによって、その勝利が偶然ではなく、勝利として完結したものであることを示し、「非戦之罪」ということを明確に示唆することになるのである。さらに⑨の例では、身内の者を車から下ろすという行為が三度も繰り返されることを述べることによって、その行為が偶然ではなく、一つの行為として完結したものである感じを与え、かつ沛公の狼狽ぶりや人格の狭量さを強く印象づけることになっているのである。

個体や時間・場所などを表す「三」については、鈴木修次氏の^(註2)指摘が参考になる。氏は「三」について、「創造の象徴数」「生成してゆく諸現象の基礎になる数字であり、もろもろの現象を統括する数字」「三の数にそろえるならば、そこにある種の安定したおちつきが示される」「『三』を小さな完数として、そこにそれなりの充実を見る」と述べている。

例えば⑫の例では、「三戸」というのは戸数の少なさを印象づけると同時に、最小の完数を表しており、生成の元となる最小の数としての意味も含んでいると思われる。すなわち「三戸」は、秦を滅ぼす最小の条件を備えていることになるのである。⑬の例は、項羽が鉅鹿で秦軍と戦うにあたって、決死の覚悟を士卒に示した時の記述である。この「三日」は、少ない日数であることを表していることは無論であるが、それは、両軍が対峙して戦いの帰趨が明かとなるのが可能な最小の完数をも表しているのであろう。⑭の例は、項羽と対峙していた章邯を二世皇帝が責めた時の記事である。章邯は使者を送ったが、その使者は三日の間門に留っていて権臣の趙高に会うこともできず、その言も信用されなかったのであった。この「三日」は、留めおかれた日数が長いことを言っているのであるが、趙高が会

おうとしないことと彼の不信の心を明確に示唆している。また、⑰において項羽が軍を「三」に分けたことは、それが安定感を与えるとともに、軍としての最小の形をとろうとしたことを示していよう。

以上のことからすると、「燒秦宮室、火三月不滅。」も、燃えている時間の長さを強調し、燃焼のすさまじさを印象づけていると共に、燃えるということが完結すること、すなわち全て燃え尽きてしまうことをも表しているのであろう。無論、各所に点在していたといわれる宮城を焼くとすれば、かなりの時日を要したであろうが、ここではむしろ「三」という数字の持つ意味に着目しておきたい。

おわりに

これまで、項羽の阬の人数および「三」の使用について見てきたが、この他にも項羽本紀には数字がある意味をもって用いられていると思われる例がある。例えば項羽の殺戮した人数についても、

・漢軍皆走、……殺漢卒十餘萬人。

(漢軍皆走げ、……漢卒十餘萬人を殺す。)

・漢軍却、……漢卒十餘萬人皆入睢水、睢水爲之不流。

(漢軍却き、……漢卒十餘萬人皆睢水に入り、睢水之が爲に流れず。)

のように殺戮した漢軍の数が記されている。阬にした秦軍の人数に相当するこの数をどのように解釈するのか。また、項羽本紀に特徴的に見られる「八」の使用にはどのような意図があるのか。こうした問題については今後の考察に俟ちたい。

注1 『修辭的殘像』外山滋比古(みすず書房 1968)

注2 『数の文学』鈴木修次(東京書籍 1983)